

五十嵐汶水編の民間産科指導書

『安産仙翁邦言教諭』^{オホコナレダルマナマリ オツゲ}について

総括

玉手英典

首題について過去三回、日本医史学会総会において、報告したのであるが、今回これらの報告をとりまとめた上に最近の調査考察を付して総括として報告したい。

本書は体裁内容については他にも類似のものがあり、五十嵐汶水の独創のものではないと思われるが、仏教のお経に準じた漢字の文章に地方弁の平がな文を付して、判り易い点は民間指導書として誠に妙を得ている。汶水は僧籍があり、平常僧服を使用していたというから、思いついたのであろうか。また本書は乾坤の二部作を予定したが第一巻のみ明治二年に版行したが第二部は版行されず終わった。蓋し明治になって医制も整備され、産婆取締令が施行され、世俗的な「とりあげばゝあ」と称される職業が認められなくなり一定の規定に基づいた専門教育を経て産婆の免許を

得たものが助産の職を得るように規定されたため、従来のような経験だけにたよった「とりあげばゝあ」は存在出来なかった。同時に本書の如き民間指導書もまた必要となつたのである。

しかし本書の内容は、誠に詳細具体的に説明してあり、その説く所は今日の医学に照しても肯定に値するものがあり、特に、冒頭に「赤児殺し」の弊風を強く警しめている点などは、汶水の見識を知る事が出来よう。幕末から明治の時代にかけて、貧しかった東北農村地方に行われていた、「子返へし」の風習を絶滅せんとした汶水の強い意志を察して得て余りある事である。妊娠生活指導についても自然にという事を教えて旧来の習慣や迷信による事をいましめ、腹帯も不必要なりと述べている。そして作業の注意、食事の方法、猷立等にも気を配り、万一早産流産出血などを発した時の応急処置や、難産の折に産科医の治療を受けるまでの処置までも述べている。特に命にかかわる様な場合の症状を細かく具体的に述べて注意を促すなど、誠にすぐれた指導ぶりといわざるを得ない。

汶水は平沢に居を構え、産科医師として近隣の信望を集

めていたのであるが、その傍にあみだの杉と称される大樹あり、その樹下にだるま堂なる安産信仰の御堂があったので、洩水は己の教えをだるま様のおつげだとして本書を記述し自己出版本として、だるま堂の礼祭の時に参詣人に配布したのである。その版木は江戸の一流の職人によって彫られたもので五十嵐家に保存されていたが、演者が昭和四十九年これを版ずりした直後に焼失し、現在残存のものが仙台市博物館に所蔵されている。本書は以上の如き理由からあまり多く現存しておらず、演者の刷った一部の他は、慶応医学部図書館に一部あるのみである。

なお五十嵐家は代々産婦人科医として名声つづき現在四代目の五十嵐章氏が仙台市において産婦人科を開業している。また祖母にあたる五十嵐とまを刀自は長年にわたって産婆を開業しその傍学校を経営して功績あり叙勲の榮に輝いた方である。

(仙台医学史研究会)

富士川游博士の思い出

田 中 助 一

富士川游博士は昭和十五年（一九四〇）十一月六日に数え年七十六歳で逝去せられたので、昭和六十一年は四十六年目に当る。

博士は昭和二年十一月に発会した日本医史学会の生みの親であり、また育ての親でもあるが、三代目の理事長で、十三年十一月からであり、現在の会員の中には御存知ない方も相当あることと思われる。今回は博士の御出身地である広島において第八十七回総会が開催せられることとなったので、博士の御人柄を御参考までに話してみたいと思う。

私が初めて博士にお眼にかかったのは、昭和六年春日本大学医学科二年生の時であった。郷里の山口県萩市で、中学校時代に地歴を習った旧師香川政一先生から、「防長医学史」の研究をすすめられ、「東京には日本医学史という